

# 善なる神と被造物における悪 ヘルモゲネスの神義論的問題

津田 謙治

(明治学院大学 非常勤講師)

## (和文要旨)

至高善たる神が創造した世界において、我々が悪を経験するのは何故かという神義論的な問題は、二世紀の宗教者及び哲学者にとって大きな関心事であった。現代にも当てはまるこの問いを、万物の材料である「質料からの創造」によって解決しようとしたのがアンティオキアで活躍したキリスト教思想家ヘルモゲネスである。彼は二世紀半ばに確立しつつあった神の「無からの創造」を意図的に覆し、プラトン主義的思考に近接した「質料」という概念を用いて善なる神の創造の業を理解しようとした。つまり、神は悪を直接創造したのではなく、材料である「質料」が悪であった為に、この世界には悪が見出されるのである。一見するとプラトンのキリスト教ないしはグノーシスに見られそうなこの思考は、「質料の根源悪」という点では極めて特殊なものである。本稿では当時のキリスト教周縁部の諸思想との比較を通じて、このようなヘルモゲネスの神義論的問題を明確に浮き彫りにしようとするものである。

## (SUMMARY)

Why we experience evil in a world created by the supremely good God was a matter of great concern to religious thinkers and the philosophers of the second century. This remains a problem today. Hermogenes of Anthiochia, a Christian thinker, attempted to solve the problem by the conception 'matter,' the substance of all things. He revoked intentionally the dogma 'creatio ex nihilo,' and adopted the platonic term 'matter' to explain the creation of the good God. In other words, he explained that there was evil in the world not because of God who created it, but because of the substance 'matter' which was its source. At first glance, this seems to be a platonic or Gnostic Christianity, but it is in fact a unique concept that regards matter as the 'radical evil.' In this essay, I make an attempt to clarify the problem of theodicy in Hermogenes by comparing it with the marginal Christian thought of the period.

## 1. 「問題設定」

ヘレニズム思想に強い影響を受けたユダヤ教徒のフィロンや初期キリスト教父のユスティノスらにとって、神が質料（物質）を秩序付けることによって万物を創造したと捉えることは批判の余地のないことであった<sup>1</sup>。特にプラトンの『ティマイオス』における創造神話は聖書的世界観に適合するものと見做された。彼らにとって、宗教的な教義を既存の哲学に結び付けることは迫害に対する護教的な意義もあったし、神の超越性と万物に働く摂理を説明するためには、このプラトンの思考がキリスト教にとって有益であると考えられたのである<sup>2</sup>。だが、万物の材料となるこの質料が神と等しく、誰にも創られずに最初から在ったと捉えるにあたって、別の教父から明確に異議が唱えられた。質料もまた永遠の存在であれば、永遠なる神の唯一性を脅かすと考えられたからである<sup>3</sup>。この問題を解くために神は質料を何も存在しないところから生み出して、その質料から万物を創造したとする「無からの創造（*creatio ex nihilo*）」論が形成される。しかしながら、二世紀の後半に確立されつつあったこの議論を、三世紀の初頭に再び「質料からの創造（*creatio ex materia*）」論へと遡行しようとした者がいた。アンティオキアやカルタゴで活躍したとされるキリスト教的思想家ヘルモゲネスである。彼は「無からの創造」が神の唯一性を説明するのに相応しいことを知りつつも、意図的に「質料からの創造」へと立ち戻ろうとしたと言える。彼が意図したものは、単なる時代的遡行ではなく、当時高まりつつあった「悪の由来（*unde malum?*）」の問題を創造論から解きほぐすことであった。本稿では、キリスト教における自然観の形成に重要な反対命題を

<sup>1</sup> ユスティノス『第一弁明』10.2など。本稿で中心的に扱われる「質料からの創造」と「無からの創造」に関する通史的研究は、マイの先行研究を参照した。May, Gerhard, Schöpfung aus dem Nichts: Die Entstehung der Lehre von der creatio ex nihilo. Berlin 1978.

<sup>2</sup> 哲学がキリスト教信仰に浸透することに対して拒否感を示すエイレナイオスにとっても、プラトンの『ティマイオス』における善なるデミウルゴスによる世界の創造は、神の善性とそれが摂理として万物に働いていることを示す限りにおいて、肯定的に受け入れられていると言える（エイレナイオス『異端反駁』III.25.5.）。

<sup>3</sup> タティアノスは自分の師であるユスティノスにおける質料観に疑問を持ち、質料の永遠性を否定した（『ギリシア人への言説』V.7.）。これがテオフィロスにおいて、「無からの創造」という教義へ発展する。

提起したにも拘わらず、これまであまり顧みられなかった<sup>4</sup>ヘルモゲネスの創造論と質料観について考察を試みたい。

## 2. 「神の創造に関する三つの仮定」

ヘルモゲネスの教説に関する資料は、彼を論駁したキリスト教父テルトゥリアヌスの著作『ヘルモゲネス反駁』に依拠している<sup>5</sup>。この教父の叙述によれば、神が万物を創造したという事柄には、聖書の記述に従って、三つの仮定が提起しようとヘルモゲネスは主張する。それは、神が万物を「自分自身から」、「無から」、そして「質料から」創造したという解釈の可能性である。

「全く光のない、この最初の陰影を、最悪の画家<sup>6</sup>（ヘルモゲネス）は次のような議論で彩るのである。それは、主が万物を自分自身から（*de semetipso*）造ったのか、それとも無から（*de nihilo*）造ったのか、それとも何かから（*de aliquo*）造ったのか（という議論）であって、主は自分自身からも無からもそれを造り出してはいないと示すことによって、ヘルモゲネスはここで残ったもの、即ち主が何かから、つまり質料である何かから（*ex aliquo ... aliquid illud materiam fuisse*）万物を造り出したと説くのである。」（2,1.）

これら三つの仮定における個々の命題に関しては、ヘルモゲネスの独自の見解という訳ではない。この時代の教会内部や、中期プラトン主義などのキリスト教を取り巻く思想的潮流の中に、これらの仮定は既に見出される。この中で、まずヘルモゲネスは第一の仮定である「自分自身から」神が万物を創造した可能性を否定して

<sup>4</sup> 我が国においてヘルモゲネスを体系的に扱った論文は、佐藤吉昭氏のものを除いて殆ど皆無と言えるだろう。佐藤氏の研究はヘルモゲネスの教義の枠組みだけでなく、中期プラトン主義やテルトゥリアヌスの唯物論的自然観などこの問題を非常に広い視点で分析している。佐藤吉昭「質料と神 - ヘルモゲネスとテルトゥリアヌスをめぐって」『聖トマス学院論叢 - V.M.プリOTT師献呈論文集』、聖トマス学院編、1977年、92-120頁。

<sup>5</sup> 彼の出生は不明。テオフィロスやテルトゥリアヌスの論駁などから推察される範囲で推察すると、彼はアンティオキアやカルタゴなどで活躍したようである。テルトゥリアヌスが200年頃執筆した『ヘルモゲネス反駁』では、ヘルモゲネスがこの時点で存命中であることが伝えられている。ヘルモゲネスに関する資料については、既に失われてしまったテオフィロスのものと、それを基底にして著述されたと考えられるテルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』、ヒッポリュトスや後代のフィラストリウスのものなどがある。本稿では主にテルトゥリアヌスの資料から、ヘルモゲネスの思想を描き出そうと試みる。尚、テキストとしてはシャポーの仏語対訳の付いた校訂版を用いた。Tertullien, *Contre Hermogène*. Frédéric Chapot(ed.), SC.439, Paris 1999. 尚、研究雑誌等の省略記号はTREに準拠する。

<sup>6</sup> ヘルモゲネスはアトリエで働く画家であるとテルトゥリアヌスは述べている（『ヘルモゲネス反駁』1,2; 22,3.）

いる。

「ヘルモゲネスは主が万物を自分自身から造り出した可能性を否定する。というのも、主が自分自身から造り出したものは何であれ、主の部分となるからである。しかし、主は分割できず、変化することもなく、常に主であり続けるのであるから、主が部分へと至ることはないのである。更に、もし主が何かを自分自身から造ったのであれば、その（造られたもの）は主に属する何か（部分）であるだろう。また生成したのも主が造ったものも、それが部分から生成し、部分から主が造ったのであるから、不完全なもの（全体ではない）と見做さなければならないだろう。」(2,2.)

万物の主である神は、部分に分割されない。部分の合成体ではなく、常に全体でありである神から一部分だけが万物として切り離されることは有り得ないのである。また、神自身から万物を分離したと捉えるならば、分離後の神も万物も全体の一部に過ぎず、完全なものではなくなってしまう。ここには神の不可分性という同時代のピュタゴラス主義やプラトン主義などに多く見られる議論が含まれている<sup>7</sup>。神は部分の統合体ではなく、故に純粋な存在と見做される。しかし、この議論は哲学に特有のものではなく、神が万物をも包括する一なる存在であると捉えることは、グノーシスを批判した教父たちの記述にも見られるものであって<sup>8</sup>、この時代の教会において特異な思考であったわけではない。

更に、ヘルモゲネスによれば、第二の仮定である「無からの創造」も、神の特性と被造物の性質に従って「自分自身からの創造」と同様に否定される。

「次にヘルモゲネスは主が無から万物を造ったのは有り得ないと断言する。主と同様に善で最善のものを造ろうと望んだ主が、善で最善の方であることをヘルモゲネスは保持しようとする。というのも、善で最善でないものを主は決して望まないし、それを造ることも望まないからである。それ故に、全てのものはこの方の性質に従って、善で最善のものとして主によって造られねばならない。しかし、悪もこの方によって造られたことが見出される。それは確かに（主の）判断や意思から（造られたの）ではない。というのも、もし（主の）判断や意思からであったならば、主は自分に調和せず、相応し

<sup>7</sup> 例えばグレシャトはブルタルコスやアルキノスなどをこの神の不可分性の例として挙げている。Greschat, Katharina, Apelles und Hermogenes: Zwei theologische Lehrer des zweiten Jahrhunderts. Leiden 2000, S.160.

<sup>8</sup> エイレナイオス『異端反駁』II.1.1.など。

くないものを造らないからである。それ故に、自らの判断で造ったのではないものは、何か欠陥のあるものから (ex uitio alicuius) 造られたと認識しなければならず、それは疑いなく質料から (造られたの) である。」(2,4-5.)

「質料からの創造」を説いたユスティノスの弟子タティアノス<sup>9</sup>や、アンティオキアの司教テオフィロスは、神の唯一性を保持するために神は「無から質料」を造り、「質料から万物」を生成したとする二段階 (cretatio prima et secunda) とも言い得る「無からの創造」論<sup>10</sup>を展開した。しかし彼らによって確立されつつあった「無からの創造」を、ヘルモゲネスは神によって造られた万物の特性に従って拒否している。最高善である神が全ての力をもって何も存在しないところから万物を創り出したのであれば、「悪」という神に相応しくない被造物が生成する余地がないからである。神が悪意もしくは無力をもって万物の形成に望んだのでなければ、この万物における「悪」の存在は「無からの創造」では説明出来ない。従って、聖書の記述のように<sup>11</sup>神が揺るぎない善であることを前提とするならば、不完全性を含む「質料から」の創造という第三の仮定のみが、可能性として残ることになるとヘルモゲネスは主張するのである。

### 3. 「神と質料の関係」

先の章では、神による創造行為が質料を用いたものであったことをヘルモゲネスが選り出した点を確認した。ここで問題になるのは、この質料と神との関係性である。既に見たように、「質料からの創造」自体は古代の教会では広く受容されており、特に問題視されてはいない。むしろ、この質料が神と等しい永遠性を所有するという見解が、ヘルモゲネスを異端者として見做す際のメルクマールとなっている。彼を論駁したテルトゥリアヌスは、この点を取り上げて強調し、糾弾の材料としている。

「さて、お前 (ヘルモゲネス) が更に正確に判断するというのだから、質料

<sup>9</sup> タティアノス自身は、師であるユスティノスの見解とは異なり、神が質料から万物を創造したとしても、質料も神が造ったものであると論じている。cf. タティアノス『ギリシア人への言説』V,7.

<sup>10</sup> cf. 有賀鐵太郎「無と創造」『有賀鐵太郎著作集 4』、創文社、1981年、139-142頁。

<sup>11</sup> ヘルモゲネスは単に哲学的考察によって万物の生成を論じたのではなく、テルトゥリアヌスによれば『創世記』解釈も行っていた。それによれば、『創世記』1.2.における「混沌とした地」は、ここでいう「質料」のことであると理解される。テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』25,1.

の可変性と変化に関して、質料を定義し、理解できるものにしてみよう。お前はこう言う。『質料は神によって仕上げられるのである。何故なら、それは変換可能で、可變的で、分割出来るからである』と。また・・・(これに対して)神は自分自身から質料を造ったのではない。というのも、神が部分になることは有り得ないし、神が不変で分割できない方であるという点で、永遠 (aeternus) であり、永続する (manens in aeuum) からである。』(39,1.)

テルトゥリアヌスは「お前はこう言う (inquis)」によって、恐らくヘルモゲネスの著作を直接引用していると思われる<sup>12</sup>。この引用箇所からは、第一の仮定が否定されたのと同様に、神は自分自身から質料を分離したのではない点が確認される。質料は部分に分割可能であるが、神は部分の合成体ではないからである。

これに続いて、テルトゥリアヌスが注釈を行っている箇所を見るならば、質料は神から分離したのではないために、神の創造に拠らずに既に在り、両者はあたかも二人の神々のように存在していたかのように捉えられている<sup>13</sup>。ここで、神と質料は、靈的(可知的)世界と物質的(可感的)世界の二元論的体系に見られるように、別々の領域における隔絶された関係とは捉えられていない<sup>14</sup>。この時代の多くのグノーシスに見られるように、神もしくは神的世界から質料が流出したという明確な存在論的關係は語られていないが<sup>15</sup>、少なくとも神と質料は創造という御業に向かって近い位置にあったことが推測される。ヘルモゲネスは、神が被造物である人間によって常に「主」と呼ばれるように、質料も常に神に従属し<sup>16</sup>、質料は神に秩序付けられるために在ったと理解している。また、両者の関係を更に明確にするために、別の特性についても触れられている。

「更に、自分自身によって運動せしめられ、また常に運動しているという点

<sup>12</sup> 論駁相手の著作を引用するテルトゥリアヌスの著述の仕方は、近い時代に書かれた『マルキオン反駁』などにも見られる。ハルナックなど、近代の学者はこの直接引用の箇所を収集し、マルキオンなど異端とされた人物の失われた著作を復元しようと試みている。cf. Harnack, A.v., Marcion: Das Evangelium vom fremden Gott. Leipzig [1924], 1996.

<sup>13</sup> 質料が神と同様に永遠なものであるならば、質料も神と見做すべきではないか、とテルトゥリアヌスは論駁の過程でヘルモゲネスの質料観を非難する。このことは、むしろヘルモゲネス自身は質料の創造以前の先在性を述べていても、神であるとは見做さなかったことを示しているといえる。テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』4,1.

<sup>14</sup> この時代に流布していたグノーシスには類似した傾向が見られ、ヘルモゲネスより一世紀程後に生まれたマニ教などでは、この二元論的体系が顕著である。cf. Layton, Bentley, The Gnostic Scriptures: Ancient Wisdom for the new age. 1995 New York; Marksches, Christoph, Die Gnosis. München 2001 (C.マルクシース『グノーシス』、土井健司 訳、教文館、2009年)。

<sup>15</sup> 例えば、グノーシスの範例として頻繁に引用されるヴァレンティノス派の神話など。cf. エイレナイオス『異端反駁』I,1-8.

<sup>16</sup> テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』3,1.

で<sup>17</sup>、(神と質料の)両者が共通のものを分有しているとお前(ヘルモゲネス)は捉えている。…しかし、神は秩序を持って(composite)運動するのであるが、質料は秩序なく(incondite)運動するのである。」(42,3.)

「お前(ヘルモゲネス)はこう言う。『質料の運動とは、神によって秩序付けられる以前は、そのような(煮えたぎる鍋のような)ものであった。混迷し、不安定で、過度の喧噪の為に理解できないもののように』。お前は更に加えて言う。『しかし、質料は神によって秩序付けられるために在り、そしてこの不規則な運動が緩慢になって、不規則な運動は理解できるものになるのである』と。」(43,1.)

神の創造以前より既に在った質料は、神と同様に自らによって運動していた。この意味においてのみ、質料は神と共通の特性を持っていると捉えられる<sup>18</sup>。ここにはアリストテレスに見られるような、神が運動の第一原因として理解される余地はない<sup>19</sup>。しかし、神の運動が秩序あるものであったのに対し、この質料の運動は混沌としたものであった。それ故に神は質料に秩序を与えて万物を生成した。それは次のように捉えられる。

「お前(ヘルモゲネス)はこう言う。『質料に浸透することによって神は世界を造るのではなく、ただ(質料の前に)現前し、それに近づくことによって(世界を造ったの)である。それはまさに美がただ現前するだけで(何かに影響を)与えたり、磁石が単にそれに近づくだけで(何かに影響を与えたりすること)と同様である』と。」(44,1.)

ヘルモゲネスが直接引用されている箇所を見るならば、彼がストア派の自然学を意識していることが窺える。ストア派では受容されるもの(ロゴス)が受容するもの(質料)に浸透するように万物が生成したと理解される<sup>20</sup>。彼らの見解において、この浸透の概念は、ちょうど蜜が蜂の巣に行きわたる様子に類比される<sup>21</sup>。これに対して、ヘルモゲネスは神と質料の直接的な接触を見出そうとはしない。それはあ

<sup>17</sup> この「運動」という概念は、古代の自然学において重要な概念であった。しかし、ヘルモゲネスはストア派に見られるような(『ストア派断片集』II,311など)物体性とこの概念を結び付けて理解しようとはしていない。cf.(『ヘルモゲネス反駁』35,2.)

<sup>18</sup> cf.「お前(ヘルモゲネス)は神が質料と等しいものであるとは見做そうとせず、また質料が神と共通のものを持っていると仄めかすのである。お前はこう言う。『質料が神と共通のものを持たないということは有り得ない。というのも、神によって質料は形を与えられるからである』と。」(『ヘルモゲネス反駁』42,2.)

<sup>19</sup> アリストテレス『形而上学』12(L),7,1ff.

<sup>20</sup> 『ストア派断片集』I,88; II,303など。

<sup>21</sup> 『ヘルモゲネス反駁』44,1. cf. 『ストア派断片集』I,155.

たかも「不動の動者<sup>22</sup>」のように、まさに完全な美のように神の秩序ある運動が、無秩序な質料の運動に影響を与え、万物生成の根拠を与えると理解される。従って、ヘルモゲネスの捉える神と質料の関係は、二つの永遠な「アルケー（原理）」と捉えられる点で、プラトンのでもストア派的でもある。しかし、神の質料を用いた創造行為は、必ずしも同時代の諸哲学と等しいものではなく、これに還元することには慎重であらねばならない。

#### 4. 「神の最高善と質料の悪」

このようなヘルモゲネスにおける神の「質料からの創造」は、万物に含まれる神の被造物として相応しくないもの、即ち悪の存在と原因を巡って導き出されたものであると言える<sup>23</sup>。既に彼の第三の仮定で確認したように、被造物の中に悪があるとするならば、それは質料の欠陥性に拠るものと捉えなくてはならない<sup>24</sup>。

だが、悪の原因を質料に求めたとしても、ヘルモゲネスは質料を本性的に悪であるとは見做していない。むしろ、彼の記述は質料が悪であることを否定している。

「質料を物体でも非物体でもないとするのと同じように、同様の論述によって質料が善でも悪でもないとお前（ヘルモゲネス）は主張するのである。お前はこう言う。『というのも、もし質料が善ならば、常にそうであったのだから、神によって秩序付けられることを欲しないであろう。（反対に）もし本性において質料が悪ならば、より善いものへの変化も受け入れないだろうし、（善への）改善を受け入れようとしないだろう。また、（質料が悪ならば）神は本性においてそのようなものである（質料）を自らの秩序へと向けるようなこともしないだろう。というのも、その働きかけは無駄になるからである』と。」（37,1.）

ヘルモゲネスはまず質料の善を否定している。善なる神によって善なる質料から万物が生成したのであれば、万物の中に悪が造り出される原因は全く見出されない。

<sup>22</sup> アリストテレス『形而上学』12(L),7,1ff. 但し、既に述べたように、質料は既に運動を自ら行っているの、神はこの初動の要因とはなっていない。

<sup>23</sup> May, Gerhard, "Hermogenes – ein frühchristlicher Theologe zwischen Platonismus und Gnosis" in: StPatr., Vol.15, Berlin 1984, S.465.

<sup>24</sup> 『ヘルモゲネス反駁』2,4-5.

何より質料が神と等しく善であり、秩序ある状態であったならば、神が秩序付ける必然性が無くなり、聖書に記述された神の創造行為は別の意味を持つことになるであろう。これとは反対に、神によって悪である質料から万物が造られたとするならば、たとえ造り主である神が善であっても、万物に善が含まれることはない。また、質料に本性的な悪があれば、善へと変えられることは神によっても困難であって、もしそれが可能であったならば恐らくこの世界に悪がある説明は不可能となるであろう。全能なる神は意図的に悪を悪のまま放置したことになるからである。

ここでの悪の由来と原因に関わる神義論的議論は、二つの問題を提起している。一つは神の全能性の欠落であり、ヘルモゲネスはこれを犠牲にすることで神の善性を保とう<sup>25</sup>としていることである。例えば、彼と同時代のプトレマイオスによれば、善なる神は万物の創造を行わず、この神のエイコーン（似像）である創造神が分割可能な質料を用いて万物を生成したと捉えられる<sup>26</sup>。ヘルモゲネスと同様に中期プラトン主義の影響を強く受けたこの思考においては、神を至高神と創造神に分離することによって至高神の最高善と全能性のみを保持し、神の唯一性を犠牲にしている。ヘルモゲネスはこのような同時代のグノーシスとは異なり、神の存在の唯一性を保持しようとしている。たとえ質料が生み出されずに在ったとしても、彼自身にとって神と呼ばれるものは一つしかない<sup>27</sup>。しかし神の最高善との理論的な整合性を保つために、神は質料を支配下に置くことが出来ず、結果的に不完全で無力な様相を呈している。神には質料の欠陥を補い、質料の悪を改善する程の能力は無いとされるのである。創造神の不完全性と無力はグノーシス的なデミウルゴスにおいては珍しくないが、創造神の最高善と不完全性が両立するような思考はこの時代においても殆ど類がないと言える。

また、もう一つの問題は、質料が善悪など如何なる属性的限定を持たずに、悪の原因として捉えられていることである。質料が無属性であるとするのはストア主義にも見られるが<sup>28</sup>、ストア主義におけるこのような質料観は神義論的問題との連続性は殆ど無い。つまり、万物における悪の問題という文脈は殆ど問題とされずに、存在の形成者であるロゴスとの関係から質料は無属性であると捉えられているの

<sup>25</sup> Greschat (2000), S.159.

<sup>26</sup> プトレマイオス 『フローラへの手紙』 33,7,7.

<sup>27</sup> ヘルモゲネス自身は、創造神と質料という二つの永遠な神を説いたのではなく、質料は神に劣り、従属するものとして位置付けていた。テルトゥリアヌス 『ヘルモゲネス反駁』 7.1. cf. Greschat (2000), S.192.

<sup>28</sup> 『ストア派断片集』 II,1168.

である。これに対して、ヘルモゲネスにおいては質料観が悪の問題と切り離されて理解されることは有り得ない。彼の創造に関する仮定では、神の善と被造物における悪との整合性を問題として、彼は「質料からの創造」を選び取っているからである。

だが、ここで複雑なのは、彼の思考が単に質料を悪の根源であるとするだけで満足しなかった点にある。質料と悪の問題と結び付けて考えるならば、ヘルモゲネスよりも僅かに時代的に先行するヌメニオスやマルキオンのように、質料に「根源的な悪」を見出す方が問題をより簡略化できるであろう。新ピュタゴラス学派のヌメニオスは、「ピュタゴラスがストア主義とは異なって躊躇なく質料が悪を具えていることを主張した」点に賛同している<sup>29</sup>。それは万物に神の摂理が働いているにも拘わらず、悪がその中に存在しているからであり、このことはまさにヘルモゲネスと同様の神義論的な問題の文脈において質料の悪を説いていると言える。

しかしヘルモゲネスの場合、質料は本性的な悪ではない。ヴァスツィンク<sup>30</sup>やマイ<sup>31</sup>など多くの先行研究に従えば、彼にとって被造物における悪は、質料の本性に由来するとは捉えられず、創造以前の「秩序無き運動」に遡源しうると理解される。質料における「欠陥」は、善悪などの本性的な属性を持たない以上、この質料に固有の運動である「秩序無き状態」に求める他はない。神はこの運動に秩序を与えたが、それは直接手を加えて改善したのではなく、ただ秩序の範型のようなもの（美や磁石として譬えられた）として現前し、間接的に影響を与えたに過ぎなかった。故に、ここでは神の質料への直接的な関係性が否定されていることから、そこに悪が入り込む余地があったと理解される。

## 5 . 「質料の状況的悪」

それでは、質料は本性的な悪ではないが、悪の原因であるとするヘルモゲネスの逆説的な質料観はどのように理解し、位置付けられるのだろうか。佐藤吉昭氏は、ヘルモゲネスのこのような質料の悪を「状況的悪」として理解する<sup>32</sup>。既に見たよ

<sup>29</sup> 『ヌメニオス断片集』52.

<sup>30</sup> Waszink, J.H., "Observations on Tertullian's Treatise against Hermogenes", in: VigChr. Vol.9, No.2., Amsterdam 1955, p.134.

<sup>31</sup> May (1984), S.464-465.

<sup>32</sup> 佐藤 (1977)、108-110 頁。

うに、質料それ自体に善や悪などの特性は賦与されていない。しかし、質料に固有の無秩序な運動が被造物の悪への可能性に結び付き、この状態は「状況的」な悪と見做されると言える。佐藤氏のこの「状況的悪」は、「悪」の「可能態」として、「間接的悪」と換言することも可能であろう。このような理解は当時のキリスト教周縁部にあったグノーシスなどにも類似した思考が見られる<sup>33</sup>。しかし、ヘルモゲネスのように、質料が「本性的な悪」（「直接的悪」）を具えていたら創造神でさえもこれを改善することは出来なかつたであろうという、「悪の可能性」そのものに関する議論は殆ど見出されない。ヘルモゲネスは、質料の「本性的悪」の可能性を知った上で、この「状況的悪」をそれと対比させて議論している点に特徴があると言えるであろう。

また、このような議論の思想史的な位置付けの考察に関して、佐藤氏は次のように説明している<sup>34</sup>。ヘルモゲネスやヌメニオスの時代においては、質料は「直接的悪」ではなく、「状況的悪」に留まっていた。つまり、二世紀の後半では、ヘルモゲネスのように質料を「本性的な（直接的な）悪」とは捉えずに、「秩序の欠けた状態（状況的悪）」と理解されることが一般的であった。それが三世紀を過ぎてプロティノスの時代になると、質料は「根源悪」即ち「直接的悪」として理解されるようになっていく。プロティノスによれば、質料は「存在」の対極にあるが故に、それは「非存在」であり、また悪である<sup>35</sup>。しかし、恐らくプロティノス以後のキリスト教的思想家のカルキディウスの時代になると<sup>36</sup>、再びヘルモゲネスのように、質料を「根源悪」ではなく、「無秩序な状態（状況的悪）」へと引き戻している<sup>37</sup>。質料におけるこの二種類の悪の捉え方から考察し、佐藤氏はヘルモゲネスからカルキディウスの質料観（「状況的悪」）の変遷を、プロティノス（「質料の根源的悪」）を間に挟んだ不連続な線として、ヘルモゲネスの「状況的悪」を「根源的悪」への

<sup>33</sup> このように、原初は悪の本性的な性質を持たなかつた質料が、創造の過程で悪へと転じる見解は、当時のグノーシスなどに典型的なものであったとアールトなどは指摘している。Aland, Barbara, "Marcion: Versuch einer neuen Interpretation", ZThK. 70, 1973, S.428-429.

<sup>34</sup> 佐藤 (1977)、109-113 頁

<sup>35</sup> 『エンネアデース』I,8,3. ここでプロティノスは、「悪とはあたかも非存在の形相のようなものである」とも述べている。

<sup>36</sup> カルキディウスの生没年は不明。しかし、オリゲネス（185年頃から254年頃）の著作から引用をしていることから、三世紀以降の人物であることは疑いが無い。cf. 土屋睦廣「カルキディウスの天体論 『プラトン「ティマイオス」註解』第56～118節」『カルキディウスとその時代』、西洋古代末期思想研究会編、2001年、100-101頁。

<sup>37</sup> 但し、カルキディウスにおいては、質料は最初から運動をしていたのではなく、静止していたので、ヘルモゲネスと全く同一というわけではない。cf.カルキディウス『ティマイオス註解』352.

前段階的状況として理解しようとしている<sup>38</sup>。

しかしこのようにヘルモゲネスの質料観を思想史的に位置付けることには、若干の問題がある。まず、従来考えられてきたように、カルキディウスがキリスト教徒で、256年頃から357/8年に没したコルドバの司教であるという説が、必ずしも確実であるとは言えなくなっているため、思想史的発展を見出す論拠が曖昧となってきた<sup>39</sup>。更に、仮にカルキディウスがプロティノス以後に活躍した人物であっても、既に見たように、ヘルモゲネスに先行するヌメニオス<sup>40</sup>の質料観の中に質料を「根源的悪」として理解しようとする特徴がある。「質料の悪」に関する発展史的な流れにおいては、ヘルモゲネス以前にも「質料の根源的悪」という理解があり、むしろヌメニオスからプロティノスへの質料観（「根源的悪」）の変遷に、ヘルモゲネス（「質料の状況的悪」）を間に挟んだ不連続な線を見出すことも可能かも知れない。但し、プロティノスとカルキディウスはヌメニオスについて触れているが、ヘルモゲネスはヌメニオスにも触れず、後代の思想家に触れられることもないので、質料観の影響史の中に組み込むことには慎重な議論が必要となるであろう。

またこれに加えて、ヘルモゲネスと殆ど時代におけるキリスト教周縁部にも、「質料の根源的悪」という捉え方がある。例えばマルキオン<sup>41</sup>やプトレマイオス<sup>42</sup>のように、質料が悪の本性を持っているという理解は、ヌメニオスだけでなく、聖書的思考を背景とした思想家の中にも見出されるのである。マルキオンにおいて質料は本性的に悪であると明確に語られるが、しかし質料は被造物における（唯一の）悪の根源であるとは明言されていない。これはヘルモゲネスにおける質料の「状況的悪」と全く逆の理解である。ヘルモゲネスによれば、質料は本性的に悪ではないにも拘わらず、悪の起源と見做される。これに対して、マルキオンにおいて確かに質料は悪であるが、このような質料を用いた創造神の方にも、悪の原因が遡源するのである。つまり、欠陥を含む材料であった質料という、材料の選定に失敗した創造神は、質料と共に悪の原因と見做されねばならない<sup>43</sup>。これは創造神の最高善を保持しよ

<sup>38</sup> 佐藤 (1977)、109-110 頁。

<sup>39</sup> 土屋 (2001)、100-101 頁。五世紀初頭にカルキディウスが著述した説もあるが、プロティノスと同時代である可能性も否定できない。

<sup>40</sup> ヌメニオスも、生没年が不明であるが、アレクサンドリアのクレメンスの記述に拠れば二世紀半ばに活躍したとされる。cf. アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』I,12,150,4.

<sup>41</sup> テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』I,15,5.

<sup>42</sup> プトレマイオス『フローラへの手紙』33,7,6-7.

<sup>43</sup> この意味ではマルキオンの場合、創造神は質料と共に、悪の「共犯者 (Spießgeselle)」であるとも捉えられる。Schüle, Ernst U., "Der Ursprung des Bösen bei Marcion", ZRGG. 16, 1964, S.39.

うとするヘルモゲネスには受け入れられない議論であろう。ヘルモゲネスにとっては、質料の悪を善へと変えることが出来なかったとしても、創造神の無力は責められるものではない。しかしマルキオンにとっては、悪たる質料を用いた創造神の瑕疵は悪の原因とまで見做されるのである。

ここで、ヘルモゲネスが質料の「根源的悪」を明確に否定し、その「状況的悪」を見た背景に、マルキオンのような者の存在を仮定することは可能であろう。もちろん、ヘルモゲネスがマルキオンに言及している資料は現存しないし、またヌメニオスのように教会の外側で質料の「根源的悪」を思考した者も存在する。しかし、少なくとも質料の「根源的悪」の議論が、創造神の最高善を否定する材料を提供することに関しては、ヘルモゲネスの視野にあった可能性は、あながちの外れなものとは言えない。確かに、これまで見てきたように、彼の議論に諸哲学の影響は間違いなくあると言える<sup>44</sup>。質料に本性的な悪を見出さないにも拘わらず、質料に創造神が直接接触れることは無かったとするヘルモゲネスの見解は、底無しの闇を彷徨とさせる質料に対して、彼が慎重に議論を組み立てようとしたことを窺わせる。

## 6. 「結語」

本研究では、ヘルモゲネスの思想を同時代の諸哲学やキリスト教的思想家との比較から分析を試みた。彼の質料観は様々な哲学に類似点が見出されるが、それは単に、殆ど無批判にプラトン主義を受容した初期の教父の思考に遡及したのではない。彼は神の創造に関する議論の発展に目を向けて、その問題を注視しつつ、「神」と「質料」の関係を論じたのである。このことは、「無からの創造」や質料の「根源的悪」に関する彼の議論から十分に窺える。彼は我々を取り巻く地上的な悪を決して楽観視せず、むしろ深刻なものと捉えたが故に、神とこの被造物との関係を考究した。そこには、彼の最高善としての神の存在が常にあり続けたのである。

---

<sup>44</sup> Greschat (2000), S.199.

**キーワード：**

悪の由来、神義論、最高善、質料、教父

**KEYWORDS：**

unde malum?, theodicy, the supreme good, material, patristics